日本赤十字豊田看護大学紀要８巻１号，47－51，2013

特　集

ボランティア活動で被災児と関わった看護学生の心理
―被災児とのコミュニケーションに着目して―

石田あすか[1]　福田由紀子[2]

要旨

平成23年3月11日に発生した東日本大震後、何か自分達にできることはないかと、A大学災害救援ボランティアサークルに所属する学生24名でボランティア活動を行った。その後の活動報告会で「子どもにどのように対応すればよいのか分からず困った」という意見が多く聞かれた。このことから、被災児とのコミュニケーションの中での学生ボランティアの心理状態における困難感などに着目し、今後の学生ボランティアに対する支援や必要な援助を明らかにすることを目的にボランティア活動を行った学生２名に半構成面接を行い、子どもと関わりについて学生が語った内容の類似したものをまとめた。ボランティアとは、自分にどんなことができるのか、何をしたいのかを明確にし、主体性を持って行う活動である。完璧主義である必要はなく、時には周囲にアドバイスをもらいながら自分なりに支援を続けていくことが重要であると考える。

キーワード　被災児　学生ボランティア　ボランティア活動　看護学生　東日本大震災

Ⅰ　はじめに

平成23年3月11日の東日本大震災発生後、テレビや新聞では毎日震災に関する情報が取り上げられ、日に日に増える死者・行方不明者数や明らかになる被害状況を知り、何か自分にできる支援はないかと考えた。3月中旬、同じ思いを持つ大学の友人がA大学災害救援ボランティアサークルを設立、その目的は定期的な募金活動の実施と、夏季長期休暇に被災地でボランティア活動を行うことであり、長期的な支援を目指していた。そのサークルで活動することで自分にも被災地・被災者の支援ができるのではないだろうかと思い、サークルの活動に参加し、夏季長期休暇にはC県A町でボランティア活動を行った。

平成23年8月31日～9月6日までの1週間、大学サークルであるA大学災害救援ボランティアサークルに所属する学生24名でB県とC県においてボランティア活動を行った。

活動終了後のボランティア活動の報告会にて、活動を行った学生から「子どもが暴力的だった」「津波ごっこをして遊んでいた」「退行のような言動が多く見られた」等の報告があり、またそれに対して「退行している子どもや暴力的に振る舞う子どもにどのように対応すればよいのか分からず困った」という意見が多く聞かれた。被災者と初めて関わる学生がほとんどであり、自身のとるべき対応方法について思い悩み、葛藤する様子が多々見られた。このことから、被災者とコミュニケーションを取る中でのボランティアの心理状態における困難感に着目し、今後の災害救援学生ボランティアに対する支援や必要な援助を明らかにすること目的とした。

Ⅱ　方法

1．対象者

B県A市でボランティア活動（平成23年8月31日

[1] 伊勢赤十字病院　日本赤十字豊田看護大学　五期生
[2] 日本赤十字豊田看護大学　地域看護学

～９月６日）を行った学生２名である。

２．データ収集方法

上記の対象者に、それぞれに半構成面接を行った。面接内容は主に、「ボランティア活動で関わった子どもの年代、性別、関わった時の子どもの人数について教えてください」「ボランティア活動で子どもと関わった場面を教えてください」「子どもと関わりについて、子どもの言動から困ったこと、感じたこと、考えたことを教えてください」「子どもの言動をどのように捉えたか、その子どもに対して行った支援方法を教えてください」「子どもと関わった場面を振り返ってその時の支援や対応は子どもにとってよかったと思うかそれともこうしたほうがという反省点はあるか教えてください」と依頼した。面接時間は、15 分～ 20 分であり、面接内容は、対象者の許可を得て録音し、逐語録を作成した。

３．データ収分析方法

データの分析は、研究の目的にしたがい、学生ボランティアの葛藤や困難感に着目し、面接内容より子どもと関わりについて学生が語った内容の類似したものをまとめた。

４．倫理的配慮

本研究の目的、方法について説明した上で、研究参加は自由であること、いつでも中断できること、話したくないことは無理に話さなくてよいこと、研究結果の公表にあたって研究参加者の匿名性を保持することを確約し、文書および口頭で説明した。承諾の同意は、書面をもって確認した。また、研究参加者の発言の持つ意味を出来る限り保持するよう努めた。本研究は、第一著者が所属する施設の倫理委員会による審査を受け、承認を得た。

Ⅲ　結果

１．子どもの様子と関わりで困ったこと、感じたこと、考えたこと

子どもと関わる中で困ったこと、感じたこと、考えたことに着目し、3 つの事例について面接内容を分類した。表１に示す。学生が語った内容は「　」で示した。

学生は、3 事例とも子どもの言動に対して「どうしていいか分からなかった」「どうすればよかったのだろう」等困難感を感じていたことが分かった。

学生が「（被災していない子どもの行動と比較すると）かけ離れていた」「度が過ぎると感じた」「ちょっとしたことでイライラしていると感じた」ように、子供たちは暴力的であったり、些細なことに苛立ちを感じている等震災の影響から様々なストレス反応を示していた。そのような子どもに対して学生はボランティアとして子どもたちと接している以上、何か支援をしたいと思う気持ちはあるが「どうしていいか分からなかった」と支援をすることの難しさを感じていた。そして、困難感を感じる中で、行動・支援ができなかった場合と行動・支援ができた場合があったことが分かった。前者の場合は「何も言えなかった」「気になるけど、聞けない」「その子と一緒に遊んだのは２日間だけで、さすがにそこまでつっこんでは聞けないなと思った」と自分の言動が子どもに与える影響を心配する気持ちから行動・支援ができなかった。しかし後者の場合でも、「やめてよーと言いながら軽く押さえたりはしていたが、そうする最中にもどのように対応すればよいのかと思う気持ちがあった」と自分の言動を心配する気持ちがなかったわけではなく、困難感を感じる中で行動・支援を行っていた。

２．子どもと関わる中で考えたこと

子どもと関わる中で考えたことを図１に示した。具体的には、「体を動かすことで今は発散できているのかなとも思う」と子どもの反応を肯定的に捉えている場面、子どもたちはストレスフルな状態であるため、だめ、だめと押さえつけるように言ったら、更にストレスになると思った」「（ちょっとしたことでイライラしていると感じたが）それも震災の影響で、退行やストレスであると思った」のように子どもの反応をストレスと捉えている場面、「２日間だったから関わり方はあれでよかったのかなと思う」「許せる範囲は許して、ほんとに危ないって思った時だけはちゃんと注意しようと決めた」「注意する場合も理由をつけて言えば、納得してくれるかもしれないから、だめと上から押さえつけるのではなく説明する、やめる方向に促すということを心がけた」「注意する際の言い方や関わり方次第だと思った。」と自らの行動・支援を肯定的に捉えているまたは有効な支援方法を見出せた場面、そして「話を聞くというのも１つの方法だったのかなと思う」「しかしそのような場面設定、

表１　子どもの様子と関わりで困ったこと、感じたこと、考えたこと

	子どもの状況の経験	困ったこと、感じたこと	考えたこと
事例①	川を見て、一人の子が「すごいわー、川の水すごいわー」みたいなことを言っていた。 突然その川や、道路を車が通ったときに水たまりの水がはねた様子を見て、「もう台風とか津波とか大っきらいだー！」と言い川の見えないところに走って行った。 頻繁に喧嘩をし、「○○君なんて嫌いだよ、もうしゃべらん」等と言うが、すぐ仲直りをし、また喧嘩する、というのを繰り返していた。 ボランティアのことを殴る蹴る等暴力的であった。	違うことに目を向けたいというように感じた。 「台風とか津波とか大っきらいだー」とゆわれたときはどうしていいか分からなかった。 何も言えなかった。 喧嘩と仲直りを繰り返していたことや暴力的だったことに関しては、普通の子どもの行動であるのかもしれないが、小児の実習等で行ったこども園の子たちの行動から考えると、かけ離れていた。 度が過ぎると感じた。 殴られたときには「やめてよー」と言いながら軽く押さえたりはしていた。 でも、そうする最中にもどのように対応すればよいのかと思う気持ちがあった。	話を聞くというのも１つの方法だったのかなと思う。 しかしそのような場面設定、環境を作るのが難しかったなとも思う。 どうすればよかったのだろう。 体を動かすことで今は発散できているのかなとも思う。 川に近づかないようにすればよかったのかなと思った。 思い出させるような状況にさせないほうがよかったのかなと考えた。
事例②	“おかあさん”という言葉を出すとすごく反応する。何も言わなくなった。暗くなった。 お父さんとかおじいちゃん、おばあちゃんといった言葉には過敏になることはなかった。 その子と公園で遊んでいたとき、落ちていたゴーヤを見て「おかあさんが作ってくれたゴーヤチャンプルーがすごいおいしかった」ってぽそって言った。 ボランティアと遊んでいる時は「抱っこしてー」等と言い、べたべたひっついてきた。 抱っこしたり一緒に遊んでいる時は機嫌が良いが、ボランティアが他の子どもと遊んでいると、その子に対して攻撃する様子がみられた。 男性のボランティアより女性のボランティアに「抱っこして」「遊びに行こう」と言っていることが多かった。	“おかあさん”という言葉を出さないように気を付けていた。 子どもから「おかあさんが作ってくれたゴーヤチャンプルーがすごいおいしかった」と言われ、「あ、そうなんだねー」と言うことしかできなかった。 気になるけど、聞けないし、どうしようと思った。 ボランティアが遊んでいるほかの子に攻撃するのはやきもちなのかなと感じた。	女性のボランティアに甘えることが多かったのは、おかあさんのことと関係があったのではないかと思う。 もっと関わる期間が長ければおかあさんのことについて関係の中から聞けたのかもしれない。 その子と一緒に遊んだのは２日間だけで、さすがにそこまでつっこんでは聞けないなと思った。 ２日間だったから関わり方はあれでよかったのかなと思う。
事例③	色ごとにきれいに分かれていた粘土をぐっちゃぐちゃにして、「きったねー」等と言いながら部屋の中で投げ合っていた。 「粘土は重くて、危ないからやめよ」と言ったが全然聞かなかった。 お互いに殴り合い蹴り合いもしていた。 ボランティアに対しても、殴る蹴る等暴力的だった。 「サロンが終わる時間だから、片付けよう」と言ったが、「やだ」と言い全然片付けをしなかった。 部屋の中でサッカーボールを出してきて、サッカーをし始めた。 震災前中学校のグラウンドだった場所に現在仮設住宅が建っているため、遊ぶ場所がないと言っていた。 「サッカーしたいけどやる場所がない」と言っていた。	サッカーボールを出してきて、部屋の中でし始めたときは「ほんとにそれだけはだめ」と言いボールを取り上げて阻止した。 暴力を振るうことや注意を聞き入れないこと等子どもの行動をどこまで許していいのかという許容範囲が分からなかった。 その点はすごく悩んだし、いまだに分からない。	子どもたちはストレスフルな状態であるため「だめ、だめ」と押さえつけるように言ったら、更にストレスになると思った。 許せる範囲は許して、ほんとに危ないって思った時だけはちゃんと注意しようと決めた。 注意する場合も理由をつけて言えば、納得してくれるかもしれないから、「だめ」と上から押さえつけるのではなく説明する、やめる方向に促すということを心がけた。 注意する際の言い方や関わり方次第だと思った。 小学校３年生だったら、普通片付けはできるのに、片付けられないし、ちょっとしたことでイライラしていると感じたが、それも震災の影響で、退行やストレスであると思った。 遊ぶ場所がない等思うように動けないということでもストレスが溜まっているのだと思った。

＊子どもの言動などの正確な記録ではなく、学生の見聞きした主観的経験である。

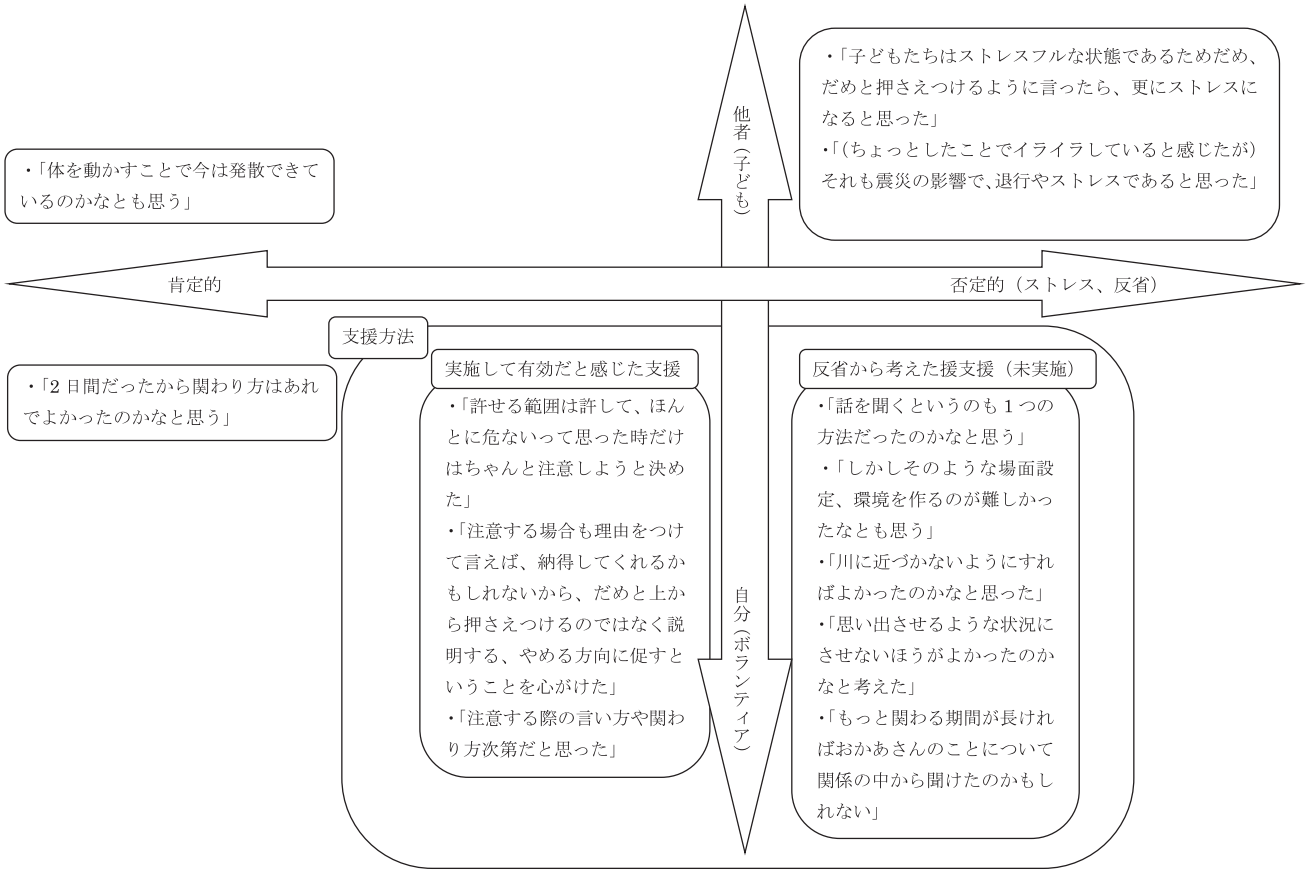

図１　子どもと関わる中で考えた内容と支援方法

環境を作るのが難しかったなとも思う」「川に近づかないようにすればよかったのかなと思った」「思い出させるような状況にさせないほうがよかったのかなと考えた」「もっと関わる期間が長ければおかあさんのことについて関係の中から聞けたのかもしれない」と自らの行動・支援を否定的にとらえているまたは反省している場面の４つに分類することができた。困ったこと・感じたことと比較すると、考え方には多様性があることが分かった。また、支援方法には実際に実施し、有効だと感じたものと、ボランティア終了後、子どもたちとの関わりを振り返って考えてみると実施できていないものがあった。

Ⅳ　考察

ボランティアの学生が子供たちと接する中で困難感を感じたこと、子どものストレス反応に対して行動・支援ができなかったことの背景には、子どもの反応を放置すべきではないが、自らの言動が更にストレスになったり、傷つけてしまったらどうしようという思いがあったためではないかと考える。対象の学生は看護学生であり、災害看護について学んでいたため、震災の影響で被災者である子どもたちがストレス反応を示すことは予想できたと考える。また、彼らは学内での事前オリエンテーションで被災者とのコミュニケーションにおける留意点について学習したが、それでも、実際に被災した子どもたちと接すると「どうしていいか分からなかった」等と困難感を感じていた。

黒田ら（2004）が「救援者は、被災者の悲嘆に対しての感情的関与、一生懸命に活動しているにもかかわらず期待した結果が見られないと職業人としての罪悪感、無力感、自信喪失、役割責任の葛藤などが生じる。これらのことで心身を消耗させ精神的不健康につながり、仕事への意欲を失ってしまう。」と述べているように、彼らがボランティアとして被災者と接する中で無力感や困難感をあまりに強く感じてしまうと、それは彼らにとってのストレスになり得るのではないかと考えた。

過度のストレスを感じ、ボランティア自身の心身や活動に悪影響を及ぼさないためには、彼らの感じている無

力感や困難感を軽減することが重要であると考える。巡ら（1997）は、「グループなど集団で活動している場合は他のメンバーなどに積極的に相談し課題の共有化を図ることで、自分一人では見つけられないようなよりよい解決策は見えてくるのである。」と述べており、アドバイスをくれる人物や環境があれば、無力感や困難感の軽減につながるのではないだろうか。また日常生活と同様に、自分の思いに共感してもらえたり、頑張りを認めてもらえることで、自信にもつながると考える。

子どもたちの示すストレス反応は様々であるため、専門家ではない学生ボランティアが事前学習やオリエンテーションで知り得た知識、情報だけで関わった全ての子どもたちに自他ともに満足のできる支援を行うことは難しいと考える。しかし、黒木（2005）が「素人のボランティアが災害支援に大きな力を発揮するのも、むしろ非専門家であるがゆえの素朴な共感によって、被災者が癒されるのであろう。」と述べているように、ボランティアにはボランティアにしか果たせない役割があると考える。

Ⅴ　まとめ

平成23年3月11日の東日本大震災発生後、何か自分にできる支援はないかと、平成23年8月31日～9月6日にA大学災害救援ボランティアサークルに所属する学生等24名で岩手県とC県にてボランティア活動を行った。活動終了後の報告会で「子どもにどのように対応すればよいのか分からず困った」という意見が多く聞かれ、学生が自身のとるべき対応方法について思い悩み、葛藤する様子が多々見られた。このことから、被災児とのコミュニケーションの中でのボランティアの心理状態における困難感などに着目し、今後の災害救援学生ボランティアに対する支援や必要な援助を明らかにすること目的に、B県A市でボランティア活動を行った学生2名に半構成面接を行った。面接は15分～20分であり、面接内容は、対象者の許可を得て録音し、逐語録を作成し、学生ボランティアの葛藤や困難感に着目し、面接内容より子どもと関わりについて学生が語った内容の類似したものをまとめた。被災者を支援したいとボランティア活動に参加したが、実際に被災児と接すると、コミュニケーションや支援の方法で悩むことが多々あり、ボランティアを支援する人物や環境の存在も必要であると考えた。

ボランティアとは、自分にどんなことができるのか、何をしたいのかを明確にし、主体性を持って行う活動であると思う。完璧主義である必要はなく、時には周囲にアドバイスをもらいながら自分なりに支援を続けていくことが重要であると考える。

本研究は、日本赤十字豊田看護大学平成23年度卒業論文、日本災害看護学会第14回年次大会（名古屋）にて発表したものに加筆修正したものである。

文献

黒木俊秀（2005）．災害ストレスと心のケア．教育と医学，53(1)，92-96.

黒田裕子，酒井明子（2004）．災害看護 人間の生命と生活を守る．東京：メディカ出版.

巡静一，早瀬昇（1997）．基礎から学ぶボランティアの理論と実際．東京：中央法規出.

小原真理子（2008）．いのちとこころを救う災害看護．東京：学習研究社.